

アジアの情勢

オーエン・ラティモア著
小川修譯

昭和二十五年一月二十五日 日本評論社刊
B 6 版 二七一頁 定 價 二五〇圓

オーエン・ラティモアがアメリカにおけるアジア研究の有力な指導者であることは、今更のべるまでもない。昨年、アメリカの政界に大きな波瀾をよんだ、所謂「マッカーシー旋風」の渦中に彼の名の現われたことは、いまだ耳新しいことであるが、彼がこの旋風にまきこまれたのは、彼がアメリカの極東政策の立案に大きな役割を果し、殊にそのアジア観に基いて國務省の極東政策に鋭い批判をなしたことによると思われる。

この「アジアの情勢」は十章から構成され、その大部分が中國問題と米ソ關係の分析とに當てられているが、彼はこゝにおいても二つの世界の對抗という世界的視野におけるアジアの諸情勢の分析を基礎として、「アメリカのアジア政策の主要點」を鋭く指摘している。彼

の祖國に對する深い愛情に基く批判と警告は異常な反響を呼んだのであるが、アメリカの政策から直接的に強い影響を与ける我々としても彼の政治的立場、その基礎になるアジア觀を見逃すわけにはゆかない。

彼は「アジアは手にあまるものとなつた」という言葉で本書を書き始めているが、この一句は彼の現代アジア觀の最も端々な表現であり、本書全體を貫く思想でもある。かかる重要な規定はいかなる根據から生れたものであるうか。彼によれば、第二次世界大戦はアジアに三つの重大なる結果をもたらした。即ち、(1)アメリカの勢力と影響の膨脹、(2)ロシアの勢力と影響の膨脹、(3)アジアにおける新しい形の勢力の擡頭である。「ロシアとアメリカがともにその支配と影響の軌道を大きく擴張した事實は万人の認めるところである」が、第三の結果つまり「アジアにおける古い型の帝國支配に服従しない新しい形の勢力の擡頭」の重要性は、ふつう過小評價されがちであるが、これはあやまりであると力説する。こゝにいう「新しい形の勢力」とは一體何をいうのであるうか。それは數世紀にわたる植民地帝國支配の蓋の下で、アジア諸民族の間に胎動し、現在アジアの推進力として民族運動の盤ベース・ロツク岩になつてゐる「民族主義」である。もとより植民地支配に抗するアジア人の民族運動は、まだ明確な政治的經濟的秩序を完成してはいないが、しかもその盤岩たる民族主義はどのような外部の壓力によつても抑えきれないものである。現在においてはもはやアメリカもロシアも自分の思ふとおりにアジアを支配することは出来ない。變貌するアジアは、二つの世界の支配しきれない第三國家群に成長しつつある、という。つまりアジアにおける民族主義勢力は、少くとも表面的には「帝國主義」「帝國主義の植民地支配」に反對する。だが同

時に共產主義に指導される勞農人民勢力をも「ソ連勢力の浸透」乃至「赤色帝國主義の侵略」と稱して排撃する。いわゆる「反帝反共」という新しい型の路線をうち出していると理解し、それに基いて民族主義政府を「二つの世界の支配しきれない第三國家群」とするのであり、こゝに西歐の立場に立つ彼をして、いまや「アジアは手にあまるものとなつた」といわしめるのである。しかも注意すべきは、彼がかかる第三國家群の出現を「健全なる現象」であるといい、また、「今日アジアのすみずみまでをとりまいてゐるのは希望の雰圍氣であつて絶望の雰圍氣ではない……」かれらの眼前にひらけつつあるのは希望のはてはしない地平線である」といつてゐることであつて、急激なアジアの變革を肯定的に高く評價し、アジアの激動を混亂や破壊とは考えず希望にみちた動きとみているのである。

ここにおいて我々は彼のアジア觀が現代アジアの變革に對する肯定的評價に基礎をおき、且アジア人の力によつて動かされるアジアの將來に大きな期待を寄せてゐることを知りうるのであるが、しかし必ずしも問題がないわけではない。即ち彼が繰返し強調するアジアにおける「民族問題」が指摘される。彼が民族問題の重要性を強調すること自體は正しい。たゞその場合、彼が民族問題をどのように把握しているかが問題である。例えば「手におえなくなつたアジアの内部に二つの力がはたらいてゐる——民族主義と革命とがそれだ。二つのうち民族主義の方がより本質的な力である」「アジアでも東歐でも、いかなる行動も民族主義と革命との混合物をその動機としなかり不可能であつた。その混合の比率は東歐とアジアとで、また、それぞれの地域の各國によつて異つてゐた。その主たる差異は、東ヨーロッパでは革命が、またアジアでは民族主義が、より大きい比率を占めていたこ

とである」という一節。ここにいわれる民族主義を帝國主義の植民地支配からの民族の解放という意味に理解するならば、「民族主義」的潮流がアジアの植民地、半植民地を怒濤のように洗ひ去つてゐることは明らかであろう。しかし戦後のアジアの現實はこの潮流が「民族主義」の枠内にどまるものでなく、また彼の如く如く民族主義と革命とが單に混合したというものでなく、民族の解放と社會革命とが一體化し、植民地民族革命、人民民主主義革命に發展してゐるのである。そこでは労働者と農民の強固な同盟を主軸としてそのまわりに廣汎な人民層を結集した民族統一戦線が革命の推進力となつてゐる。かつてのように民族ブルジョアジーは革命のヘゲモニーをにぎりえないし、また實際ににぎつてもいない。こゝに現在の植民地における民族革命の重要な特質があると思ふ。アメリカにおける屈指のアジア通である彼が、このような「アジアの情勢」をとらえ得ないとするならば、それは彼自身の階級的立場に原因するのではなからうか。思うに、もはや嵐の中に成長しつゝある「アジアの情勢」は歴史的な見地から、また動いてゐる大衆の感覺でのみ理解し得るのである。

ところで彼は、「アジアは手にあまるものとなつた」とはいふものの「しかしそれに影響を與えることまでできなくなつたわけではない」といふ。アメリカの極東政策への批判と警告と共に建設的な一連のアジア政策を提出するのも、こうした可能性を見出せばこそである。彼によれば、「アメリカの政策が成功をおさめるためには、できるだけ國連を通じて操作し、またできるだけ國連を強化しなければならぬ」と。それは對立する二つの世界的方式がロシアに有利でありすぎる現在、「すでにロシアにおいて決定的に重要となり、さらにヨーロッパにおいても重要ならん」といつある第三國家群、をロシア側に

ではなく、アメリカ側にひきよせることは、國連を通じての活動によつてのみ可能」だと考えるからである。かかる努力の中にこそ、アメリカがアジアにおける過去の失敗を挽回しさらに成功に向つて前進する鍵がある、と主張する。それというのも、中國のみならず、アジア全土に突きあげらるべきあらゆる政治構造の唯一の盤岩が民族主義である限り、もしこの基本的な政治構造の問題に關して、アメリカが「革命に影響を與える専門的技術において」ロシアや他の共產主義國におくれをとるならば、アジアの「上部構造にはより多くの社會主義が見られよう」し、そうでないならば「資本主義と私企業と民主主義政治との多彩なる様相がつくり出されよう」つまりアジアの第三國家群は影響如何によつてどちらにでも轉がりうる可能性をもつてゐると考えるからに外ならず、従つてこれ等に影響を與えることによつて、自己に牽引し、それによつてアメリカの指導的地位が維持出來ると考へるわけである。そこでアメリカの極東政策というものはこの線にそつてりちたてらるべきであつて、かつてのような武力干渉の如きは何等アメリカに利益するものではない、と。

このような彼の考え方をみるならば、アジアの民族主義が手におへぬ第三國家群に成長することに大きな期待をかけるのも、要するに、アメリカにはもはやアジアをコントロールする力がなくなつた以上、アメリカはアジア諸國を自己の陣營にひきよせてそれらを自國の政策に参加させ、かりにもソヴェト陣營への傾斜をなさしめないようにとの意圖をもつからに外ならないと解せられる。彼が中共に對して寛容であるのも亦、アメリカの努力によつては中共がソ連に偏しない中間勢力第三國家家になりうると考えるからである。しかしこの書のかかれた一九四九年から今日に至るまでのアジアの歴史の展開は、他の追

隨をゆるさぬアジア専門家としての彼に何を教えつつあるであらうか。また愛國者である彼のアジアに寄せた期待は、どの程度満たされたであらうか。

ともあれ、彼においてアジアの變革が第二次大戰の結果として戰後の國際情勢の中にあられた本質的變化に呼應するものがあることが、一應とらえられておりながら、我々をしてその構造分析に物足りなさを感じしめ、また彼が「二つの世界の對立」という時、神經質な程に「米ソの對立」として意識せられ、對立しているのがむしろ米ソ兩國ではなく二つの異つた體制——資本主義體制と社會主義、人民民主主義體制——であるという認識がよわいように感ずるのは、私のみであ

らうが。彼は「資本主義は凋落も崩壊もしていない」という。その判斷は彼にまかせるとして、彼のアジアに寄せる希望がアジア民衆の足音にかけられることを私は望むのであり、それがまた彼をしてアジアに對するより深い理解へ導くものであらうと思う。

最後に、アジアを裏切り、アジアの孤兒となりつつある祖國を憂ふる私は「アジアの行く方向に日本も歩む」という彼の言をよく味わうと共に、この書にみる如き程度の批判と警告をなしてさえ「赤」の極印をおされねばならないというところに、現在のアメリカの姿をみるような氣がする。それはファシズムの嵐の吹きすさんだかつての日本をほうふつさせるものがある。

〔横田 滋〕